

つたえたいこと

溝 口 靖 人

最近多くの日本の方々は、世界で起こる出来事に「世界は変わった」と感じているらしいことと思います。

特に、イラクとの戦争において、アメリカ軍が用いた「ヒット・アンド・アウェイ」方式の戦い方や、その後「ブッシュ大統領の勝利宣言」が早々と、帰国途上の航空母艦の船上から発せられ、セレモニーが世界発信された際には、さすがアメリカは強い！という感想であったに違いありません。しかし、今でもその感想をお持ちの方々も減っているでしょう。

勝利宣言が派手であったのに、その後のイラクにおいて、多くの米兵に犠牲者が出ている事、イラクを完全占領する訳でもなく、これで本当の占領軍？と疑問符を付けざるを得ない程占領管理には手を焼き、軍備においては強力な軍隊ではあるが、「占領」とは程遠い状態にあります。

アメリカは変わったのでしょうか？

過去、「世界秩序」を謳い上げ、共産圏国家から、自由主義の勝利を賛歌していた、アメリカは何処に行ったのでしょうか？

アメリカ！自由主義国家の強力な代表的国家は何処に？と、よく目を凝らして観察してみると、そこには、同時テロに怯え、いつ敵に攻撃されるか判らないといった風

情の超軍事大国が存在しています。「自由主義」を応援するアメリカではなく、「自国の安全保障」に只管、邁進するアメリカがあるのです。世界秩序を謳い上げるのではなく、テロに備えて、焦燥感に煽られ、「先制攻撃」論を掲げるアメリカになったとも言えます。

アメリカは変わったのでしょうか？

実は強いアメリカ軍は、そこに居るのである。かつて、冷戦時において国防予算を、対 (NATO) 北大西洋条約機構諸国側に対し、50対30程度の規模を持っていたアメリカが、今ではその差は50対20までに大きく開いています。

2007年頃には、アメリカの国防予算は世界全ての国の同予算を上回る、とも言われて居るアメリカです。

(44兆円・レーガン大統領がソ連を牽制して掲げた予算にも匹敵します。)

この問題を国防予算だけに絞って検討するのは、片落ちとなるかも知れません。

世界も変わっているのだから。

それでは、世界の変化は何処に？と検討してみましょう。

私の狭い知識で、いろいろなニュースから集めた情報を整理してみるだけでも、いくつもの、例をあげる事が出来ます。

1. 高速コンピューターの開発があり、高速、大容量の情報源の「大河の流れが」出来上がっています。従来のような、紙に印刷した分厚い本として数える事が不可能なほど、大量な情報量です。
2. 過去、はっきりとした国境線で明確に分けられていた、他国、他国民との接触が増加してきました。「全てのニュースが個人に直接届く」という、いわば不可能な事が、現在では瞬時に行われているのです (IT)。しかもPCを保有する全ての個人に直接、情報は届く。(いつ、何処でも、瞬時に) ユビキタスと言われて居ます。
3. 同時に巨大で急速な情報量の増大は、「質量の無い経済」といわれるほど世界経済を動かしています。
4. 通信の容易さは、在庫商品に国境をなくす勢いを与えました。
5. 「ニューエコノミー」も生まれました。技術や生産性、採算性の限りない発達は、経済に、もはや「停滞」は起こり得ない、という神話さえ生み出したのです。(日本で設計し、生産は中国で行なわれる等、在庫の概念も薄れてきています。)
6. 人の移動の激しさと、ITによる新しい工業生産方式も生まれています。
7. 人間の起源に基づき、遺伝子や人体の部分の解明も進み、人間の人造分体の生産も始まっています。
8. 法律は当然の事、遅れてはいるが、だんだん偏世界的なものに近くなって来ました。
9. 宇宙の解明も進み始め、宇宙がさらに複数あるとの説(ブラックホールは他の宇宙との結合部分だという説)すらも現れました。
10. 約30億年前に地球に衛星が衝突し、地球の表面を覆っていた海の水が衝突熱により蒸発し、海水が全部干上がって大気に蒸発したあと、やがて又、温度が下がって落ち着いた大地の表面に(約3千年から4千年後)大量の雨が降り注ぎ、海に「生命体」が戻り、地下の深いところに生き延びていた生命があることも判って来た(30億年前の?一部の生命痕に継続して、水や栄養を与え続けていると、動き出したという)。この為、現在の地球には生物が存在しています。

ざっと考え出した例を見るまでも無く、世界全体が変わっているのです。

今日、私は上記のような例を羅列して、皆様を煙に巻くつもりではないのです。熱心に聴いていただく皆様に、人間の尊厳を訴えたいのです。

もうしばらく、この話を続けさせてください。

或いは上記のような、「新しい現実」がアメリカの対外戦略を変えたのではないのでしょうか?

アメリカの関心はかつての「グローバル安全保障」から、「アメリカ本土防衛」に大きくシフトしたのです。

イラクの攻撃も「ブッシュ大統領の演説に抛れば」緊迫した世界の動きを見て、先制攻撃を行う！テロに先駆け！と宣言したのではないかと。

今のアメリカは1991年の湾岸戦争の終結時代とは大きく、違っているのです。

新聞によれば、去る1月下旬にスイスのダボスで行われた世界経済フォーラムに登場した、米国国務長官「パウエル氏」に最大級の関心が集まったのです。

それは、欧州を中心として、対イラク戦争への疑問と不安を大きく「憂う」声ばかりであったのです。

「サダム・フセインの横暴は別にしても『九月十一日の同時多発テロ』と今度の先制攻撃は直結できないではないか？」

「アメリカの一国主義」

「独善」

「戦争で破壊はできるだろうが、戦後のイラクをどう回復させるのか？」

「さらにテロを誘発するだけではないのか？」

これは、安全保障会議でも、国連理事会でもない。「経済フォーラム」での話です。

最近のアメリカは少し現実的になって来ているようにも見受けられます。

アメリカにとって、ニューヨークの同時多発テロがいかに大きな衝撃であったか、これは或いは「日本と同じ島国、アメリカ

の衝撃」と言えるかもしれません。

勿論、軽率な判断をさらに続けるつもりは、さらさら、ありませんが、皆様もそれぞれがお考え下さい。

新しい学問である、「国際関係論」とは実にこのように、注意深く世界を観察し、経済、政治、社会、国の内外、世界、天候、気象、（将来は宇宙も）も網羅しながら研究する事であります。

でありますから、断じて、独断で、見通しを述べる気持ちは無いのであります。

アメリカは上記のような国防予算を持った、圧倒的なハードソフトを有した、超大国であります。今は覇権国であると申しても良いかと思えます。北朝鮮がアメリカと、直接話し合いをしたい気持ちも、当然とは、言えないまでも、理解できます。

国防予算以外にも鍵は存在しています。

一般的に国家が、他の国との比較を通じて、優越感に浸るのは、1) 経済、2) 軍備、3) 国力（主として人口）の三つに勝る場合と言われます。

科学技術にせよ、外交にせよ、文化・文明にせよ、基本的には上記がベースとなり、作られて行くと解釈できます。

ハンチントン教授が有名にした「文明の衝突」です。

この国力調査において「人口の増加」は、注意深く、研究する際、「キーワード」となるのです。加えて人口増には「宗教」が大きなテーマにもなります。

人間がこの世にあって、救いを求める

際、どうしても「死」に対処できる手続きが必要で「キリスト教」「イスラム教」「仏教」という世界の3大宗教の存在があります。

ハンチントンさんは「この衝突が始まる」というのです。

人類の歴史を顧みていくと、確かに無視できない事実です。しかし人類学的な問題は、人口の増加率にも在る事を忘れてはいけません。

実は、この三大宗教は人間が歴史を重ねて作り上げてきた、「哲学」とも言える、「考え方」にある訳です。別の言い方をすれば、「生命」が自然との厳しい戦いの果て、ヤットたどり着いた、一種の「安心・哲学」であるのです。しかも、人類歴史の、長い年月のうち生命体として完成しつつあった、最後の二千年位の間に出来たのです。

西暦2004年の今年、イエズス・キリストが生まれてたった2004年しかたっていないことを、(若し本当なら)忘れてはいけません。

地球が作った、(或いは自然・宇宙が作った)「人間」という「考える」「手段」と「言葉」を持った動物が作り出した、文明の衝突が本当に起こるのでしょうか？

恐れる事は唯一つです。「人間の増加率」です。1国で人口動態が年々3%を超えて増えていくと「戦争」が起こると言われています。人間が増えて「摩擦と衝突」が起こり始めると、統計上は殆どの場合戦争が起こると言われています。

話しは「人間の尊厳」に近づいてきたようです。

近現代史上、二十世紀に入り、二つの世界が、西欧先進国に強烈な自己主張を表明し始めました。一つはアジアが主張した、文化の表明であり、もう一つはイスラム教の挑戦であります。

このいずれもが、『人口の増加を基本に意見の主張が始まっている事』を見逃してはなりません。明治維新以降、日本は「入欧脱亜」と称して、西洋の文化を大いに組み入れ、社会や国家を成立させ、「太平洋戦争」という、大きな犠牲を払って、現在に至っています。

アジア人を支えている、大きな要素の一つが、経済の成長であります。確かに日本、中国、韓国、東アジアを含め、大きな経済力が生まれて来ました。

二つ目はこの経済成功が、アジア文化によるものだと、アジアが自ら考え始めている点です。(ハンチントン教授の説)

三つ目は各アジアの間には文明の違いを感じながらも、「儒教」の価値体系を尊重した共通項が存在する事です。特に、儉約、家族、規律の三項目は重要な要素であります。

皆さんご存知の事ですので簡単に終わり、次の大事な点に触れていきましょう。

イスラムの復興です。ハンチントン教授の文章をそのまま述べますと、“「外国から輸入したものは」は輝かしい、或いは「ハイテクの物品としては」素晴らしい。だが、

外国から取り入れた社会制度，政治制度など無形なものは，（我々の）致命傷にもなる。イランで失脚した（ハイレセラシェ・パーレビー）国王にお尋ねになると良い。われわれにとってイスラムは単なる宗教にとどまらず，生活そのものである。われわれアラビア人たちは近代化を望んでは居るが，必ずしも西欧化を目指してはいない。”（トルコのような一つの例外は別として，上記は全てのイスラムに対する言葉でしょう。）

上記の列外国である，トルコにおいてもイスラムが無くなったのではないことを忘れないで下さい。

キリスト教のマルチン・ルッター派とカルヴァン派のように，改革の意欲に満ちた宗教は，イスラム教ではシーア派とスンニ派であります。

16世紀のヨーロッパや今日のイラク総選挙を思い起こしてください。

この中世，欧州に起こった宗教改革が今，盛んにイスラムの新聞をにぎわせている，「イスラム原理主義活動」なのです。

余りこの問題には深入りするのはやめましょう。

私の知らない事がたくさんありますので……なぜなら「石油」という，とんでもないものがその間に介在するからです。

しかし「人口問題」は大切です。

1950年から2000年の初めにかけて，大変な事態が起こっています。

1965年に世界の人口は33億人でしたが，1995年には53億人になりました。年平均1.85%増えているのです。

これに対しイスラム諸国の人口はほぼ一

貫して2%を超える勢いで増えているのです。

イスラム全体では

1980年に世界人口の18%をイスラム教徒が占めていましたが，2000年に20%を超え，2025年に30%を超えると予想されます。

西欧社会ではマルチン・ルッターの「宗教改革」は若者による，史上有数の運動であったといわれ，西欧の民主主義革命の時代も若者の増大の時期と一致しております。

イスラムの若者は宗教，信仰ではイスラムが解決すると考えるだろうが，社会の不正，政治，経済の後進性，軍事力不足などに幻滅を感じるのではないのでしょうか。

アジアのインド・マレーシア・インドネシアはどうなるのでしょうか？

私の興味はこれらのアジアのイスラム教諸国に『更に』向いていきます。

2004年度市民大学トラム『豊橋市教育委員会連携講座』講義録

講義日 2004. 6. 19